

イベント補部を量化する副詞的数量表現

—度数副詞と遊離数量詞の共通性—

佐藤 香織

1. はじめに

「掃除」「修理」など、項構造を持ちイベントを表す名詞（イベント名詞¹⁾）を含む文中には、基本的に2つのイベントが存在する。つまり、主文述語が表すイベントと、補部のイベント名詞句が表すイベントである。例えば、(1)には名詞句で表される「車の修理」というイベントと主文が表す「太郎が次郎に頼む」というイベントが存在している。

(1) 太郎は次郎に〔車の修理〕を頼んだ。

イベントが2つ存在するということから、イベントを量化するような副詞的数量表現（度数副詞、遊離数量詞）を生起させた場合に、係り先が2つあることが予測される。1つは主文のイベントであり、もう1つは補部のイベントである。これまでの数量表現の研究では、主文の表すイベントの量化については多くの指摘が成されてきたが、補部イベントの量化についてはほとんど取り扱われていない。本稿では(2)の解釈①や(3)の解釈①のように、補部イベント内の要素のみを度数副詞や遊離数量詞が量化する解釈が得られる場合があることに着目し、この場合の度数副詞や遊離数量詞がどのような特性を持っているかについて論じる。

(2) 太郎は娘に〔花の水遣り〕を3回命じた。

解釈①：「花の水遣り」＝「3回」（「命じる」回数）は3回でなくともよい

解釈②：「命じる」＝「3回」（「水遣り」の回数）は3回でなくともよい

(3) 太郎はその業者に〔パソコンの修理〕を4台頼んだ。

解釈①：（一度に）修理を4台頼んだ

→ 「パソコン」＝「4台」、 「頼んだ」＝「1回」

解釈②：（これまでに）修理を4台頼んだ

→ 「（複数回）頼んだ」⇒「パソコン」＝「4台」

次に本稿の考察対象を規定する。まず(2)の解釈②のような用法は、主文イベントの

回数を量化しているため、本稿での「補部イベントの量化」には含まない。更に、(3)の解釈②のような用法も、主文述語を遊離数量詞が分配的に量化した結果としてイベント名詞句内部のホスト名詞が間接的に量化されたと考えられるので、本稿での「補部イベントの量化」には含まないことにする。これは Ishii (1999) 及び石居 (2003) が指摘した「VP 数量詞」の用法である。Ishii (1999) 及び石居 (2003) は、ホスト名詞との相互 c 統御条件 (Miyagawa, 1989) に従わない遊離数量詞を「VP 数量詞」とし、その解釈は主文述語を分配的に量化する解釈に限られると述べている²⁾。しかし、Ishii (1999) 及び石居 (2003) では、イベントが2つ存在する場合の文については考慮に入れていないので、(3)の解釈①のような場合 (すなわち、相互 c 統御条件に従わない遊離数量詞が主文述語を分配的に量化しない場合) については説明していない。本稿では、(3)の解釈①の遊離数量詞についても「VP 数量詞」と呼ぶことにする。つまり度数副詞と同様に VP 数量詞も、イベントが2つある文中においては必ずしも主文の述語を量化するわけではなく、補部イベントを量化する場合があると考え。詳細は2節及び3節で述べる。

また本稿では、文中にイベントが2つ存在する場合の補部イベントの量化について取り扱うため、(4)のようにイベント名詞句が文中に現れていても、実質的には文中にイベントが1つしか存在しない場合についても考察対象から外す。この場合の主文の述語は、基本的に light verb (軽動詞) である。

- (4) a. 太郎は2週間で〔車の修理〕を5台やった。
- b. 太郎は今年になって、〔庭の掃除〕を3回行った。

(4)の場合、イベント名詞句の表すイベント (「車の修理」「庭の掃除」) と主文の表すイベント (「太郎がやる」「太郎が行う」) を、それぞれ独立したイベントとして捉えることはできず、「太郎が車の修理をやる」「太郎が庭の掃除を行う」が文中に存在するただ1つのイベントであるのが自然である。

以下、本稿では副詞的数量表現が補部イベントを量化する際の特徴について、まず、度数副詞と VP 数量詞による量化の構造的な相違点を明らかにする (第2節)。そして、補部イベントの量化の可否には、度数副詞と VP 数量詞どちらの場合にも補部イベントの性質が重要な要因となっていることを指摘する (第3節)。

2. 補部イベントを量化する度数副詞と VP 数量詞の相違点

本節では、(5)のように度数副詞及び VP 数量詞がイベント名詞句内のホスト名詞を量化する解釈が得られる場合について、これらは補部内部の要素を量化しているという点では共通するものの、構造的な相違点が存在することを押さえておく。

- (5) a. 太郎は1日の仕事として、娘に〔花の水遣り〕を3回命じた。

解釈：「花の水遣り」＝「3回」

- b. 太郎はその業者に一度に〔パソコンの修理〕を4台頼んだ。

解釈：「修理」＝「複数回」⇒「パソコン」＝「4台」、「頼んだ」＝「1回」

まず度数副詞について述べる。(5a)の度数副詞「3回」のホスト名詞は、イベント名詞「水遣り」であり、「3回」は「水遣り」の回数、つまり補部イベントの回数を量化している。この場合、度数副詞とそのホスト名詞は、相互c統御関係にある。つまりこの場合の度数副詞とホスト名詞は統語的に構成素を成すと考えられる。

それではVP数量詞の場合はどうだろうか。(5b)のVP数量詞「4台」のホスト名詞は、イベント名詞句内部の不定名詞「パソコン」であり、度数副詞のように補部イベントの回数を直接量化しているわけではない。また、この場合VP数量詞とホスト名詞は相互c統御条件になく統語的に構成素を成す関係ではない。なぜ、この場合のVP数量詞とホスト名詞は関係を持つことができるのだろうか。このことに関しては、本稿では次のように考える。VP数量詞が、補部の表すイベントを分配的に量化することが可能であると考えるのである。そうすると(5b)の場合、VP数量詞がまずイベント名詞「修理」を分配的に量化しその結果「パソコン」の個数が量化されているということになる。

3. 補部イベントを量化する度数副詞とVP数量詞の共通点

2節で見たように、度数副詞及びVP数量詞がイベント名詞句内の名詞を量化する解釈が得られる場合には、それぞれ、ホスト名詞との構造的関係が異なっていた。しかしこのような違いがあるにも関わらず、度数副詞やVP数量詞がイベント名詞句内の要素と関係を持つ場合には、共通の生起条件が存在する。本節では、この生起条件について述べる。

3.1 補部イベントの性質

(6)のような場合、度数副詞はイベント名詞が表すイベントの回数を量化することができないが、(7)ではそれが可能になる。

- (6) a. 花子は記者たちの前で〔知事のセクハラ〕を3回暴露した。

解釈：「3回」＝「暴露した」(≠3回の知事のセクハラ)

- b. そのキャスターは自分の番組で〔来月の総理の中東訪問〕を2回取り上げた。

解釈：「2回」＝「取り上げた」(≠2回の総理の中東訪問)

- c. 今日の午後、FM局は〔台風の九州への上陸〕を3回伝えた。

解釈：「3回」＝「伝えた」(≠3回の台風の上陸)

- (7) a. 太郎は娘に〔花の水遣り〕を3回命じた。

(「3回」＝「水遣り」という解釈が可能)

- b. 課長は秘書に〔会議室の掃除〕を2回頼んだ。

- (「2回」 = 「掃除」という解釈が可能)
- c. 太郎は後輩たちに〔練習への参加〕を3回約束した。
 (「3回」 = 「参加」という解釈が可能)

(6) と (7) では、イベント名詞句の表すイベントの性質が異なる。まず、(6) のイベント名詞句が表すイベントは、(6a) (6c) では、主文の表すイベントよりも先に成立している。また、(6b) では今後の実現が確定されている。佐藤 (2002) では、このようなイベントを「実現が確定されたイベント」と呼び、これらを補部とする述語は基本的に非コントロール述語であり、コントロール性の述語はこのような補部をとることはできないことを指摘した³⁾。一方 (7) のイベント名詞句が表すイベントは、主文の述語が表すイベントが実現されない限り、論理的、時間的に実現されることができない。佐藤 (2002) ではこのような「まだ実現されるかどうか確定されていないイベント」のことを「実現が未確定なイベント」と呼んだ⁴⁾。度数副詞とイベント名詞とは、(6) (7) とともに相互 c 統御関係が成立しており、構造的にはどちらもイベント名詞が表すイベントを量化することが可能であるという予測ができるが、その予測が正しくないことが (6) から分かる。イベント名詞句が (6) のように「実現が確定されたイベント」を表す場合は、度数副詞は補部のイベントの回数を量化することができないからである。

イベント名詞句の表すイベントの性質の違いは、度数副詞だけではなく VP 数量詞による補部イベントの量化にも関わっている。(8) のイベント名詞句が表すイベントは「実現が確定されたイベント」であり、(9) は「実現が未確定なイベント」であるが、(9) のほうが許容度が高い。

- (8) a. ?? 太郎はその時入国審査官に〔不法難民の入国〕を5人知らせた。
 解釈：「入国」 = 「複数回」 ⇒ 「不法難民」 = 「5人」 (「知らせた」 = 「1回」)
- b. ?? 図書館司書はその日図書館長に〔蔵書の紛失〕を20冊伝えた。
 解釈：「紛失」 = 「複数回」 ⇒ 「蔵書」 = 「20冊」 (「伝えた」 = 「1回」)
- c. ? 教頭は昨日の職員会議で〔学生の退学〕を4人報告した。
 解釈：「退学」 = 「複数回」 ⇒ 「学生」 = 「4人」 (「報告した」 = 「1回」)
- (9) a. 太郎はその業者に一度に〔パソコンの修理〕を4台頼んだ。
 解釈：「修理」 = 「複数回」 ⇒ 「パソコン」 = 「4台」 (「頼んだ」 = 「1回」)
- b. 政府はその日〔難民の入国〕を50人認めた。
 解釈：「入国」 = 「複数回」 ⇒ 「難民」 = 「50人」 (「認めた」 = 「1回」)
- c. その出版社は鈴木教授に昨日〔論文の執筆〕を3本依頼した。
 解釈：「執筆」 = 「複数回」 ⇒ 「論文」 = 「3本」 (「依頼した」 = 「1回」)

度数副詞と VP 数量詞による補部イベントの量化は、それぞれホスト名詞との構造的な関係が異なるのにも関わらず、イベント名詞句が表すイベントが「実現が未確定なイ

ベント」の場合に基本的に可能であることが分かった。この場合、「イベント名詞句十度数副詞 (VP 数量詞)」の部分は (10) のように擬似分裂文による焦点化が可能である。基本的に、擬似分裂文による焦点化が可能な要素は統語的構成素⁵⁾と考えられている。

(10) の (a-d) はそれぞれ、(7a) (7b) (9a) (9b) を擬似分裂文にしたものである。一方、(11) の (a-d) は (6a) (6b) (8a) (8b) を擬似分裂文にしたものであるが、これらは補部が表すイベントが「実現が確定されたイベント」であり、「イベント名詞句十度数副詞 (VP 数量詞)」の部分の焦点化は基本的に不可能である。

- (10) a. 太郎が娘に命じたのは〔花の水遣りを 3 回〕だ。
- b. 課長が秘書に頼んだのは〔会議室の掃除を 2 回〕だ。
- c. 太郎がその業者に一度に頼んだのは〔パソコンの修理を 4 台〕だ。
- d. 政府がその日認めたのは〔難民の入国を 50 人〕だ。
- (11) a. *花子が記者たちの前で暴露したのは〔上司のセクハラを 3 回〕だ。
- b. *そのキャスターが自分の番組で取り上げたのは〔来月の総理の中東訪問を 2 回〕だ。
- c. *太郎がその時入国審査官に知らせたのは〔不法難民の入国を 5 人〕だ。
- d. *図書館司書がその日図書館長に伝えたのは〔蔵書の紛失を 20 冊〕だ。

また、構成素テストとして川添 (1999) の「しか」を用いたテストがある。基本的に「しか」のフォーカス (焦点) は、統語的構成素でなければならないとされる。前述したように、イベント名詞句が表すイベントが「実現が未確定なイベント」の場合、度数副詞は補部イベントの回数を量化することが可能になるが、この場合 (12b) のように「しか」のフォーカスが「イベント名詞句十度数副詞」の部分になる。

- (12) a. 太郎は娘に〔花の水遣りを 3 回〕頼んだ。(「水遣り = 「3 回」の解釈)
- b. 太郎は娘に〔花の水遣りを 3 回〕しか頼まなかった。
 解釈: ほかの仕事は一切頼まず、「花の水遣りを 3 回」だけ頼んだ。

また、VP 数量詞がイベント名詞句内のホスト名詞を量化する場合にも、(13b) のように「イベント名詞句 + VP 数量詞」の部分が「しか」のフォーカスになることが出来る⁶⁾。

- (13) a. 太郎はその業者に昨日〔パソコンの修理〕を 30 台命じた。
 (「命じた」 = 「1 回」の解釈)
- b. 太郎はその業者に昨日〔パソコンの修理を 30 台〕しか命じなかった。
 解釈: 昨日他の仕事は一切命じず、〔パソコンの修理を 30 台〕だけ命じた。

度数副詞の場合とは異なり、VP 数量詞はそのホスト名詞と相互 c 統御関係になく、構

成素をなすような関係にないのにも関わらず、擬似分裂文や「しか」による焦点化が可能であるのは注目すべきである。また、補部イベントが「実現が未確定なイベント」である場合に、度数副詞や VP 数量詞がイベント名詞句内のそれぞれの宿主名詞を量化可能になり、その場合に上記の 2 つの構成素テストで確認されたような「イベント名詞句十度数副詞 (VP 数量詞)」という 1 つのまとまりが形成されるのはなぜだろうか。3.2 節では、この問題について考察する。

3.2 モノ名詞句の定性との関係

「実現が未確定なイベント」を表すイベント名詞句の場合、イベント名詞句の外側から度数副詞によってイベントの回数を量化されることや、VP 数量詞によってイベント名詞句内の不定名詞の個数が量化されることが可能であることは、次のような現象と並行的に捉えられる部分があるかもしれない。

- (14) a. 太郎がホームランを 40 回 打った。
解釈：「ホームラン」＝「40 本」
b. 花子が友人に 10 回 手紙を送った。
解釈：「手紙」＝「10 通」 (北原, 1996)

不定名詞句を含む文内に度数副詞が表れている場合、北原 (1996) でも述べられているように、度数副詞が不定名詞句を量化しているように見える場合がある⁷⁾。このような解釈は、述語が度数副詞によって量化されることにより、間接的に名詞句の数量が量化されたことから生じるものと考えられる。一方、定名詞句が含まれる文の場合は、次のように度数副詞が名詞句の数量を間接的に量化することはできない。

- (15) a. 太郎が映画館で「ハリリー・ポッターと賢者の石」を 2 回 観た。
b. 花子が 3 回 その会社 を訪問した。

つまり、度数副詞がモノ名詞句と間接的にはあれ関係を持つ場合には、少なくともモノ名詞句が不定でなければならないわけである。このような条件は、度数副詞がイベント名詞句の表すイベントを量化することが可能な場合には、イベント名詞句が「実現が未確定なイベント」でなければならないという条件と並行的であるように思われる。つまり、イベント名詞句が表すイベントの「確定／未確定」の違いは、モノ名詞句の「定／不定」の違いと対応する可能性がある⁸⁾ということである。イベント名詞句の場合もモノ名詞句の場合も、「まだ確定されていないもの」であれば名詞句の外側から量化可能であるが、すでに「確定されたもの」の場合は量化することは不可能なのではないだろうか。

更に、不定名詞句が含まれる文にのみ遊離数量詞は生起可能であるという指摘もある (Ishii, 1997)。

(16) a. ジョンが本を3冊買った。

b. *ジョンがそれらの本を3冊買った。

(Ishii, 1997)

ただし、これらの遊離数量詞は相互 c 統御条件に従うものであり、モノ名詞句と構成素関係にあるもの (Ishii (1999) 及び石居 (2003) では「NP 数量詞」) なので、本稿で扱ってきた、イベント名詞句内のホスト名詞と VP 数量詞との関係とは異なっている。しかしホスト名詞句である「モノ名詞句」が「不定」であれば遊離数量詞 (NP 数量詞) によって量化可能になるという現象は、「イベント名詞句」が「不定」のイベント (すなわち「実現が未確定なイベント」) であれば、遊離数量詞 (VP 数量詞) がイベント名詞句内の要素を量化できるという現象と並行性があるように思われる。更にこの場合、「モノ名詞句 + NP 数量詞」が構成素関係を成していることと対応するような現象として、3.1 節で述べたように「イベント名詞句 + VP 数量詞」の部分が構成素のようなまとまりを成している現象が存在する。このように考えると、NP 数量詞によってモノ名詞句が量化されるためにはモノ名詞句が「不定」でなければならないという条件と対応する形で、VP 数量詞によってイベント名詞句内の要素を量化するための条件 (イベント名詞句が表すイベントが「不定」 (= 「未確定」) でなければならない) を捉えることが出来る。

4. 終わりに

本稿では、文中にイベントが2つ存在する場合 (主文が表すイベントと補部が表すイベント) において、補部が表すイベントが副詞的数量表現によってどのように量化されているかに着目し、このような副詞的数量表現として度数副詞と遊離数量詞 (VP 数量詞) を取り上げ、これらの性質について考察した。そして、度数副詞と VP 数量詞とは、それぞれそのホスト名詞との構造的関係が異なる (イベント名詞句内の不定名詞の個数を量化する VP 数量詞は相互 c 統御条件を満たさず、イベント名詞が表すイベントの回数を量化する度数副詞は相互 c 統御条件を満たす) のにも関わらず、基本的にイベント名詞句が表すイベントが「実現が未確定なイベント」である場合にのみ、それぞれのホスト名詞を量化することが可能になることを指摘し、かつ、この場合に「イベント名詞句 + 度数副詞 (VP 数量詞)」があたかも構成素を成すような「まとまり」を成していることを示した。そして、このような現象について、イベントの「確定/未確定」とモノの「定/不定」とを対応させる方向での説明を試みた。

イベントの性質が数量表現の量化の仕方に影響を与えるという事実は、数量詞や数量表現の研究においても、更に追究すべき問題であると考えられる。また、そもそもイベント補部を量化するということがどういうことなのか、全てのイベント補部が「確定/未確定」という概念だけで説明できるのか、など解決すべき問題は多く、更なる検討が必要である。

注

- 1) Kikuchi (1994) による定義である。
- 2) Ishii (1999) 及び石居 (2003) では、遊離数量詞にはホスト名詞句と構成素を成す「NP 数量詞」と、述語を副詞的に量化する「VP 数量詞」の 2 種類があると述べている。そして、「NP 数量詞」には意味的な制限がないが、「VP 数量詞」は分配的解釈に限られるとしている。分配的解釈とは、述語の複数事象解釈のことを指す。例えば、次の (i) の「5 人」はホスト名詞「学生」と相互 c 統御関係にないため、VP 数量詞である。
 - (i) これまでに学生がこのピアノを 5 人持ち上げています。(石居, 2003)
解釈: 「(複数回) 持ち上げる」⇒「持ち上げた学生の総数」= 「5 人」また、佐藤 (2002) では、(3) の解釈②のような、「VP 数量詞」が主文述語を分配的に量化した結果イベント名詞句内のホスト名詞の個数が量化される場合について考察した。
- 3) 「実現が確定されたイベント」は、基本的には非コントロール述語 (伝える、話す、打ち明ける、等) の補部である。これらの補部は、「こと」節で表した場合に「こと」節内部に「シタ」形、「シテイル」形が現れることが可能である。(佐藤, 2002)
 - (i) a. 太郎は教授に〔論文の訂正〕を伝えた。
b. 太郎は教授に〔論文を訂正 (する／した／している／することに) した こと〕を伝えた。
- 4) 「実現が未確定なイベント」とは、基本的にはコントロール述語 (約束する、命じる、頼む、等) の補部であり、「こと」節で表した場合に、補文末に「スル」形しか許されないイベントである。(佐藤, 2002)
 - (i) a. 太郎は教授に〔論文の訂正〕を約束した。
b. 太郎は教授に〔論文を訂正 (する／*した／*している / *することに) した こと〕を約束した。
- 5) 構成素テストとしては、このほかに「と」による等位接続のテストが挙げられる。川添 (2002)、木村 (2003) 参照。イベント名詞句が等位接続される場合の詳細については、紙幅の都合により別稿に譲りたい。
- 6) VP 数量詞がイベント名詞句内のホスト名詞を量化する場合には、「イベント名詞句 + VP 数量詞」の部分のみが「しか」のフォーカスになることが可能なわけではない。次のように VP 数量詞だけがフォーカスになることも可能である。このような場合は、川添 (1999) のテストでは「パソコンの修理を 30 台」の部分の構成素を成さないと考えられることになる。
 - (i) 太郎はその業者が昨日パソコンの修理を [30 台] しか命じなかった。
解釈: パソコンの修理に関しては、昨日 30 台だけ命じた。(「命じた」= 「1 回」)しかし実際にはこの場合でも (13b) と同様に、VP 数量詞が主文述語ではなく補部イベント内の要素とのみ関係を持つ解釈が可能である。このような、構成素テストと「イベント名詞句 + VP 数量詞」の部分の解釈上の「まとめり」とのズレについては、更なる課題としたい。
- 7) モノ名詞句の「定／不定」とイベント名詞句の表すイベントの「確定／未確定」とがどこまで並行的に考えられるかは、更なる議論が必要である。次のように、イベント名詞句内のモノ名詞が定である場合には、イベント名詞句が表すイベントが「未確定」であっても VP 数量詞による量化が不可能になる場合がある。
 - (i) a. その出版社は鈴木教授に〔論文の審査〕を 3 本頼んだ。
b. *その出版社は鈴木教授に〔その論文の審査〕を 3 本頼んだ。
- 8) 北原 (1996) は「一回」「一度」などの度数副詞を「頻度数量詞」とよび、連用用法の頻度数量詞は「Event (事態) を個体数量的に計量するものである」としている。

引用文献

- 石居康男 (2003) 「(第 3 章) 名詞句移動」石居康男・西垣内康男『英語学モノグラフシリーズ 13 英語から日本語を見る』pp. 51-108、研究社
- 川添 愛 (1999) 「日本語遊離数量詞と量化一後置存在量化詞と副詞的量化詞一」『九大言語学研究室報告』

第 20 号、pp. 1-28、九州大学文学部言語学研究室

川添 愛 (2002) 「と」による等位接続と遊離数量詞『言語研究』122 号、163-180.

北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186、pp. 29-42.

木村宣美 (2003) 「遊離数量詞の構成素性について」『人文社会論叢』第 9 号、121-137、弘前大学人文学部

佐藤香織 (2002) 「イベント名詞句補部からの数量詞遊離現象」『日本語文法』2 巻 2 号、pp. 112-127.

Ishii, Yasuo (1997) On Weak and Strong NPs in Japanese: A Preliminary Study. *Report(1) Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*. pp.109-123. Kanda University of International Studies.

Ishii, Yasuo (1999) A Note on Floating Quantifiers in Japanese. *Linguistics: In Search of the Human Mind*. pp.236-267. Tokyo: Kaitakusha.

Kikuchi, Akira (1994) Extraction from NP in Japanese. *Current Topics in English and Japanese*. pp. 79-104. Tokyo: Hituzi Shobo.

Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.

付記

本稿執筆にあたり、筑波大学大学院文芸・言語研究科の茂木俊伸氏から大変有益なコメント、ご指摘を頂いた。感謝申し上げたい。なお、本稿における不備や誤りは、当然筆者の責に帰せられるものである。

(さとう かおり) 慶北大学校客員教授／筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科 応用言語学)